

境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和6年正月に掲載することばを紹介します。

伝道掲示板

blog版から

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。経典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺は松岩寺ホームページのblogに載せています。



千田完治 写真

三月のことば

花びらは散っても
花は散らない

金子大栄

春にふさわしい言葉を三月にかかげました。金子大栄（1881～1976）師の言葉らしい。「らしい」と書くのは、またまた孫引きだからです。引用のものは、松原行樹講演録『心に一輪の花を』（伊勢崎市・玉村町佛教会編）です。

松原という姓をみて、「ふふーん」と思った方もおられるはず。行樹君は松原哲明（1939～2010）師の四男です。ということは、仏教書としては空前のベストセラーになった『般若心経入門』（祥伝社）の著者、松原泰道（1907～2009）師のお孫さんです。

令和5年10月26日に伊勢崎市文化会館で行われた講演を文章化したものです。行樹師の顔写真入りの講演録ですが、チラット見た時は、15年前に突然に亡くなった御父君哲明師の追悼録がまた出たの！と思わせるような、よく似ています。

行樹師は現在、横浜市にある円覚寺派に属する寺の住職として、昨年までは円覚寺派教学部長という重役に就任していました。そんな新進気鋭の禅僧のお話しの場所は、定員1500人のホール。お寺の本堂での法話よりも、大ホールでの講演が多かった、泰道師と哲明師の在りし日を思い出させます。まさしく、「花びらは散っても花は散らない」のです。

A4版で30頁の冊子の中から一部分を引用します。行樹師は哲明師の四男と書きましたが、今は年上に2人のお兄さんしかいません。ご長男は生まれてすぐに亡くなっているのです。その五十回忌法要の時の話です。

「花びらは散っても花は散らない」。金子大栄先生のお言葉でございます。「散ってゆく花びらの中に、散らない、本当の仏の命をわかってくれよ」ということでしょうか。私がここにいるということはどういうことでしょうか。私だけではありません。皆さんお一人お一人がここにいらっしゃるということ。皆さん自身が生きているということはどういうことでしょうか。先祖代々の果てしなく長い歴史の中で、生まれては亡くなり、生まれては亡くなり、そして花びらは散っていったけれども、この自分自身に流れている大きな命というのは、今ここに私達がこうして花を咲かせているんだということですね。何とも不思議なこのお花というのは自分が生まれてから一度も枯れたことがないんです。この花を私達は仏の命というのではないのでしょうか。

法要当日（注＝長兄五十回忌）、横浜（注＝帰路）までの道中で、そういうことにはっと気づいたときに、短い、二日と四時間、この命を一生懸命に生きて、この世を去って行った兄の、仏の命を正にいただいて生きているんだなということを実感致しました。この仏の命というのはお釈迦様のお言葉にもございました。

この部分だけでは消化不良。近いうちに、大ホールではなくて、松岩寺本堂でお話をしていただける機会を作れると良いのですが。春の夢に終わらないように！

墓じまいをやめる選択

◇岸本葉子さんの「墓じまいをやめる選択」は、令和六年二月十四日付け、日経新聞夕刊の記事です。四百字詰原稿用紙三枚ほどの文章です。全部は載せられないので、後半部を略して紹介します。

「墓じまいをやめるかも」。知人が言った。墓じまいの情報交換をひと頃よくしていた人。墓をやめる、ではなく、墓じまいをやめるとは？

自分の墓は知人はもう決めてあった。亡き夫とよく花見に行った山に樹木葬の霊園があると知り、夫は希望してすでにそこへ。自分も申し込むつもりでいる。気がかりは親の墓だ。実家近くの寺にあり、継承者はない。知人人が毎年管理費を納めているが、それもてきなくなる日が来る。管理料の支払いが途絶えた墓は無縁墓になってしまうと、何かで読んだ。今のうちに墓じまいし、自分と同じ霊園へ移した方がいいのでは。そのあたりまでは、コロナ禍前に聞いていた。

知人の語るに、もつとも気が重いのはお寺へ話すこと。事の性質からして対面で意思を伝えるべきだと思いが、温顔で迎えられるすめられるお茶を前に切り出す瞬間を想像するだけで、胃が痛くなる。「離壇料」なる言葉のものしきさもさることながら、示された額が資力を超えるとき、値切れるものかどうか。知人が資料請求した代行業者もあるそうだが、お寺との交渉は自牙でしないといけないらしい。コロナ禍で他県への移動が控えられるのを言い訳に先延ばししてきた。

このほどようやく墓を訪ねた。お寺に話す心の

準備はできておらず、まずは親への無沙汰のわびと墓掃除だ。桜で知られる寺である。花どきは遠くからも空が薄桃色に見えるほどだが、今はまだ枝のみだった。

久しぶりに足を踏み入れた境内はだいぶ変わっていった。江戸時代の墓がなくなっ、一角がきれいに均され分譲されている。新しい土台の並ぶ中、桜の古木は残っていた。晴れた日で知人の目には、陽光とともに花びらの降り注ぐさまが浮かんだ。

そのときに思ったという。親の墓のある一角もいずれ更地になる。江戸時代の人の眠る一角より100年先かどうかの違いくらいで。ならば何もせつば詰まって掘り出さなくていいのでは。石まで動かし、自分にもたぶんお寺の人にも心の苦しむことをして。夫との花見山が自分たちに慕わしい場所のように、両親にはここが安息の地かもしれないのだ。無縁墓という悲哀なもののように焦っていたが、他人と合葬になるそう、考えてみれば、それは自分の樹木葬のところへ連れてきて同じこと。

心境の変化は、エネルギーがうせてきたためもある。（後略）

岸本さんの知人のすごいところは、昔から続く墓も、流行の樹木葬も同じ、と気づくことでしょうか。この文章だけで十分なのですが、余計なお世話の松岩寺住職の感想は、編集後記に書きました。